別紙１

令和７年度　観光振興対策特別委員会　視察報告書

１ 視 察 日

令和７年 11 月 20 日（木）～21 日（金）

２ 参加委員

副委員長　平原留美

委　員　大島美香、髙橋浩輔、橋本洋一、滝沢一成、こんどう彰治

３ 視察先等

月　日	視察先	調査事項
11 月 20 日（木）	福井県福井市	福井市観光振興計画、観光資源としての一乗谷朝倉氏遺跡について
11 月 21 日（金）	石川県金沢市	金沢市持続可能な観光振興推進計画について

４ 視察報告

⑴ 福井県福井市　福井市観光振興計画、観光資源としての一乗谷朝倉氏遺跡について

① 視察概要

福井市は中心部の「まちなか」と、それぞれの個性を持つ地域が一定のエリアにコンパクトに凝縮されており、容易に回遊が可能な環境にある。当日は福井市の担当職員より観光振興に対する取組の説明をいただいた後、一乗谷朝倉氏遺跡に移動。現地にて遺跡の保存活用を担う「(一社) 朝倉氏遺跡保存協会」の会長に遺跡の保存活用について説明をいただきながら視察を行った。

② 視察内容

一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名「朝倉氏」が５代 103 年間治めた戦国城下町跡で、1573 年織田信長に焼き滅ぼされ、以来約 400 年間土の中であったがその遺構は大きく損なわれることなく「奇跡的に」ほぼそのまま残った日本のポンペイとも言われている。昭和 40 年代から地元・地域一丸となって徹底した発掘調査が進められ、それを基に丁寧な保存・活用がなされてきた。遺跡全体が国の「特別史跡」、４つの庭園跡は「特別名勝」、出土品は「重要文化財」と全国でも６例しかない「国の三重指定」となっている。

福井市の観光施策として、将来的には令和 11 年（2029）春、中部縦貫自動車道の県内道路開通予定を見込んで、インバウンド誘客の強化・広域観光を推進している。

一乗谷では「復元」ではなく「復原」を手法として用いられてきた。本物だから「復元」ではなく「復原」とし、エリア内には発掘された遺構をそのまま復原した「平面復原地区」や、発掘された遺構・遺物に基づき建造物が再現された「復原街並」がある。家々の石組

みの土台、井戸、便所、道から家に入る踏み石などすべて本物であった。

「建物のつくりはさすがに想像で作っているのでしょう」との質問に対しても、「織田勢に焼き滅ぼされたとき、礎石に接していた柱の根元が焼け残り、四角く柱の跡が残り、その寸法で柱を立てた。家屋のつくりは当時の京の街図に描かれているものを参考にした。雅な京文化を尊んだ土地なので、まちは京に似ていたことは容易に想像できる」との答えであった。

戦後少しずつ遺跡発掘を進めるなかで、これはとてつもない遺跡であることが明らかになり、国は概ね田畑であった私有地を国有地としていった。農民たちが土地を手放すにあたっては様々な困難があったようである。一つの解決策として、土地を手放した人たちが、遺跡を管理する会社をつくり運営することになったという。以来、その会社が管理を請け負っている。地元の方々にとって、単なる遺跡は生産性のない、むしろ日々のなりわいに無益な存在となることも多い。それを、観光業という「金を産む」存在に変えていくアイデアと時間をかけた努力を民と官がやれたという点は注目してよい。

③ 考察

福井市一乗谷朝倉氏遺跡とは、ナラティブ（物語）とファクト（事実）を、地元と行政が時間をかけて訴求し続け、観光資源として確固たる存在に造っていった、その好例であると思う。だが物語だけでは、観光地とならない。そこに足を運び、実感できるファクト（事実）が必要である。一乗谷にはそれがある。掘り返せば、手つかずの、まがい物ではない実物が出てくるのである。地元と行政が時間をかけて観光資源としていく。それが大事なことを今回学んだ。

上越市における史跡の「復元」で議論の俎上に上がるのは高田城跡の桝形門や春日山城跡である。「復元」は明確な資料に基づいて行われるものであり、慎重かつ厳格に行われなければならないことは理解できるし、そうでなければならない。しかしながら、文化財の観光や教育等への積極的活用ニーズの高まりや次世代への継承を考慮した場合、「可視化＝見える化」への議論は避けては通れない。こうした背景により文化庁も令和 2 年に従来の「復元」に加え、（調査を尽くした結果）本来の意匠や構造が正確には分からなかった場合でも「復元的整備」として認め、文化財の積極的活用に幅を持たせている。このような変化に鑑み、当市においても「復元的整備」を前向きに検討すべき段階に来ていると感じた。

文化財の積極的活用や継承に向けて、より多くの対象に訴求するためには一定程度の「可視化」は必要である。そのために、先ずは発掘をはじめ史料文献等の調査研究を徹底して

行うこと。そして、それに基づいた文化財の保存活用に向けた計画を策定し、関係する主体や市民と中長期ビジョンを共有することが大切である。

上越市に対しては法定計画である「文化財保存　活用地域計画」の早期策定を望みたい。また同時に、間もなく改定時期を迎える「国指定史跡　春日山城跡保存管理計画」や各計画とも整合を図り、中長期の保存活用に一貫して取り組めるよう仕組みを整えるべきと考える。

文化財の保存・活用に対して、今後どの主体がどのように役割分担をしていくのかを見据えつつ、特に春日山において行われているような担い手の育成にも引き続き取り組むことが大切である。

観光プロモーションについては、先進事例も参考にしつつ様々な主体や地域との協力連携により、更に効果的に進めて頂くことを望む。実効性のある施策を計画しなければ画に描いた餅状態になるのではと危惧する処である。

⑵ 石川県金沢市　金沢市持続可能な観光振興推進計画について

① 視察概要

金沢市役所にて、経済局観光政策課より「金沢市の観光行政」についての説明を受けた後、質疑応答及び意見交換を行った。金沢市は、「持続可能な観光振興推進計画」として歴史と文化をまちづくりの中心に据えつつも近代化にも力を入れたまちづくりとして、都心軸を設けて区域分けし、「保存」: 伝統環境保存区域と「開発」: 近代的景観創出区域と「まちなか区域」として明確に示し、長年にわたりまちづくり施策に取り組んでいることに強い印象を受けた。

② 視察内容

前田家以来の城下町としての明確なストーリーを持ち、市独自の条例「伝統環境保存条例（昭和 43 年制定）」を皮切りに「景観まちづくり関連条例」が 27 条例もあり、これらを活用して町並みや用水、伝統文化を守りながら観光資源として磨き上げている点は、上越市が学ぶべき重要な視点だと感じた。

また、周遊バスやシェアサイクルなど、観光客が回遊しやすい環境整備が徹底されていることも、都市としての魅力と利便性を高める要因となり、ここまでの観光地として選ばれる理由がよく理解できる。

③ 考察

金沢市の観光施策で特に印象に残ったのは、「国内１５都市との交流プロモーション」、「ミシュランガイド評価３都市との連携」の２点であるが、いずれも首都圏及び関西圏都市との広域連携が主で、当市を含む上越圏との交流が盛り込まれていなかったのは残念であった。

その理由は上越圏域の魅力が足りていないということであろう。これまでの寺町サミットや北前船寄港地交流などの広域連携も今は有名無実化している。加賀藩参勤交代のルートは北陸新幹線のルートとも重なる。広域連携のポイントは上越の商品価値の向上すなわち魅力度アップにあるということを痛感した。

上越市は、夜桜、蓮、SAKE まつり、日本スキー発祥地など全国に誇れる資源を持ちながら、それらをうまく活用できていない、また周遊できるだけの整備がなされていない、魅力の発信に弱い等々課題を改めて認識した。金沢市の取り組みは、上越の観光資源と類似する点が多く（城下町・寺町・伝統文化等）を「どうまとめ、どう見せ、どう守るか」の良き参考となった。

また、体験プランの消費が多いとのことで、金沢市では 200 もの体験プランが存在する。その数の多さに驚いた。「コトの商品化～上越でやってみたいコト！」は上越市でも今まで以上に「上越でなくてはできないコト」を発掘しどんどんと実践していく価値があると感じた。また、時代に即したインフルエンサーに焦点をおき「ファムトリップ」を金沢市では実践されていて、情報の拡散は観光には即有効的と良い事例と感じた。

今回の視察を通じ、上越市においても、「歴史・文化の整理」「観光と市民生活の調和」「回遊性向上」「計画的な観光マネジメント」の重要性を再確認し、得られた学びを今後の上越らしい持続可能な観光の形として「伝統文化を守りつつ、生活しやすく、楽しく観光できる」為にどう取り組むか、大変参考になる有意義な視察であった。

以上